P-52 他肺葉内転移(pm2)を伴う肺癌手術症例の検討

大谷 真一[1]・佐藤 幸夫[1]・長谷川 剛[1]・手塚 憲志[1]
遠藤 俊輔[1,2]・蘇原 泰則[1]
[1]自治医科大学 呼吸器外科；[2]自治医科大学附属大宮医療センター 呼吸器外科

【目的】他肺葉内転移(pm2)を伴う肺癌手術症例の予後を病理所見因子別に検討した.
【対象】1984年～2003年に原発性肺癌に対して完全切除手術を施行された症例のうち，病理学的に他肺葉内転移(pm2)が認められた14症例(平均年齢63.4歳)を対象にした.
【方法】摘出標本の組織型，原発腫瘍径，リンパ節転移，胸膜浸潤，胸膜播種，他肺葉転移の個数について組織学的に検索し，各因子別に生存曲線を求めて予後を検討した．また，他肺葉転移巣の切除法(肺葉切除あるいは肺部分切除)別に予後を検討した.
【結果】各因子のうち，組織型が細気管支肺胞上皮癌(BAC)である群，肺胸膜弾力膜浸潤のない(p0)群，胸膜播種のない(d0)群は有意に生存予後が良好だった.
【結論】他肺葉内転移(pm2)を伴う肺癌はⅣ期であり，予後不良であるとされているが，BACやp0やd0で完全切除が見込める症例は，手術によって比較的良好な予後が得られる可能性がある.